

従って、視覚一運動機能を視覚走査的認知と手操作的認知に分けて検討することの妥当性が確認され、脳性マヒ児の視覚一運動機能の特徴が明らかにされた。

次に、視覚走査的認知と手操作的認知の問題が発達障害によるのか、学習障害によるのかが検討された。

視覚走査的認知においては、脳性マヒ児は発達の遅れは認められない。手操作的認知においては、健常児は7歳から8歳の時期が断差的な発達を示す発達の臨界期であるが、脳性マヒ児ではそれが9歳から10歳の時期であり、約2年の発達の遅れが認められる。そして、手操作的認知の遅れは年少児において顕著であるが、年齢の増加につれて、その差は減少するという発達の傾向が認められた。

学習の障害による要因については、回轉的図形構成、図一地関係、構成の手掛り、運動機能の観点から検討された。

健常児は回轉的構成と非回轉的構成の差はなかったが、脳性マヒ児は回轉的構成の方が非回轉的構成より明らかに困難であった。

さらに、脳性マヒ児は健常児に比較して、背景図(地)を効果的に利用できず、むしろ背景図によって図形構成が妨害される。

そして、図形構成の手掛りとして与えられた条件を活用できず、手掛りとして与えられた部分を全体にイメージ的に対応操作することが困難であった。運動障害の程度と図形構成との間には有意な相関関係はなかった。

結論として、脳性マヒ児の視覚一運動障害は視覚走査的認知すなわち認知 (Recognition) の障害ではなく、手操作的認知すなわち、認知したものを動作的に表現・再生する構成 (Reconstruction) の障害が基本的な問題であることが明らかにされた。

そして、構成障害の要因として、発達の障害と学習の障害の要因を考慮することの必要性が示唆される。

九州大学

教育学博士

田崎敏昭 社会的影響に関する研究

本研究は二部より成る。第I部は社会的影響の結果としておこる同調現象について、その生起の要因、同調者への反応、同調過程の心理的メカニズムの解明を目的としたものである。第II部では、社会的影響の背景となる勢力をとりあげ、研究の対象を学級集団に絞り、まず児童・生徒並びに教師の勢力の源泉を明らかにし、それが学級集団の地位構造や集団機能にどう影響しているかを究明する。

〔第I部 同調の研究〕

## 1 同調の要因

(1) 認知レベルでの同調研究は多いが、行動レベルでの研究は少ない。集団での箱作りという作業過程でその行動に他者から圧力がかかると同調行動が起った。さらに、その同調行動は、適応的、内向的性格、高い集団誘引性などにより促進されることがわかった。

(2) 親和欲求、達成欲求は同調の重要な促進要因である。しかし、これらは単純に作用するのではなく、圧力の源泉(権威者か仲間か)と交互作用して同調を促進していることを実験的に明らかにした。

## 2 同調者、逸脱者に対する知覚と感情

人工暗空間内でおこる任意の対象の主観的距離判断と客観的距離との誤差を測る「距離知覚装置」を作った。自分の意見に同調した者、自分から逸脱した者の写真を装置内で定位させると、前者は客観的位置より遠くへ置く者と近くに置く者に分かれるが、後者は遠くへ定位させる者が多かった。これは、被験者が逸脱者に対しては負の感情を負荷し、同調者に対しては正と負、両方の感情を負荷する者があって、この感情が知覚に影響したと考察された。

## 3 同調に関する緊張低減仮説

今日、同調に関して斉合論による説明は最も一般的である。しかし、同調による他者との斉合は、自己内部との不斉合でもある。にもかかわらず同調現象がおこるのは、自己内部との不斉合よりも他者との不斉合を回避する何かがあると考えられる。その何かを内部緊張の差と考え、「他者との不斉合(非同調)は自己内部との不斉合(同調)より内部緊張が高いであろう」という仮説をたてた。Crutchfield タイプの実験後、同調した課題と非同調の課題を想起させたところ、後者の方の想起率が高かった。想起を Zeigarnik 効果とするなら、非同調において内部緊張が高いことになり、上記の仮説は証明された。

## 〔第II部 社会的勢力の研究〕

### 1 児童・生徒の勢力資源とその効果

児童・生徒を対象にした調査の結果を因子分析し、畏怖、指導性、親和性、明朗性、外見性、優越性、業績といった7つの勢力資源因子を抽出した。これらの勢力資源が、学級内における勢力地位とどうかかわり合っているかを検討したところ、勢力地位を確保する為に必要な資源(親和性、明朗性)と地位上昇を規定している資源(指導性、優越性、業績)に分かれることがわかった。

### 2 教師の勢力資源とその効果

児童・生徒が認知する教師の勢力資源を明らかにするため、小、中、高校生を対象に調査を行い、その結果を因子分析して、親近・受容、外見性、正当性、明朗性、

罰、熟練性、参照性の勢力資源因子を抽出した。まず、発達との関係を見ると、発達が進むにつれ、いずれの勢力資源も教師に対する付与の程度が低くなっていた。次に、教師のPM式指導類型との関係を見ると、PM型指導の背景には熟練性、正当性、親近・受容、参照性の勢力資源が、P型指導の背景には罰の勢力資源が児童・生徒により認知されていた。スクール・モラルとの関係では、教師のもつ親近・受容、正当性、明朗性、外見性などの勢力資源は児童のモラルを高めるが、罰の勢力資源はそれを低下させるということが明らかになった。

筑波大学

教育学博士

都築繁幸 聴覚障害児の単語の視記憶に関する実験的研究

本研究は、聴覚障害児の単語理解及び単語習得過程を明らかにしていくために言語学習の視覚運動回路に焦点をあてながら、文字という情報が言語的に符号化されていく側面に着目し、聴覚障害児の単語の視記憶に関する基礎的な検討を行うことを主要な目的とした。

実験1-a, 1-bでは、刺激の属性に着目して直後一括再生法で検討した。その結果、記銘材料の関係づけの基礎となる手がかり、知識の体系の差異において、聴覚障害児と健聴児とは異なっていることを推察した。

実験2-a, 2-b, 2-cでは、プローブ法を用いてリスト要因とプローブの型との関連から検討した。その結果、実験1とほぼ同様な結果を得た。

実験3-a, 3-bでは、呈示順序によってひきおこされる体制化について検討した。その結果、呈示順序に従って、系列内の構造的特性を予測制御する能力の程度に基づいて新しく呈示された項目と前項目との関係づけへの手がかりが規定されているものと推察した。

実験4では、系列の長さを規定する単位として「文節」をとりあげて検討した。

実験5-a, 5-bでは、記銘材料の概念に属する単語の想起量が記銘の意図と情報処理の深さを操作された時にどのような効果をもつのかを検討した。その結果、聴覚障害児においては、実験事態で新たに項目が呈示さ

れた時に、それを処理していく様式を変更することが健聴児よりも困難であろうと推察した。

実験6-a, 6-bでは、言語学習に及ぼす物語文構成活動の効果を検討したが、その効果は認められなかった。

実験7-a, 7-bでは、再認記憶に及ぼす文脈効果を検討した。その結果、同一文脈条件が他の条件よりも再認数が多く、文脈が異なると再認成績が悪くなるという文脈効果が示された。

実験8-a, 8-bでは、カテゴリー名呈示が再生を促進するかどうかを検討した。その結果、手がかりの有無の変化の要因が再生により大きく影響を及ぼしていることが示された。

実験9-a, 9-bでは、先行経験として文章化経験が促進効果をもつかどうかを検討した。その結果、作文群や短文群のような先行経験としての文章化経験をもつ群の方が再生がすぐれ、その効果が示された。

実験10-a, 10-bでは、学習課題に対する一定の構えを形成させて、その際にとられるストラテジーと課題要因との関係を検討した。その結果、先行のストラテジーに対する意識性が後続のストラテジーに何らかの影響を及ぼしていることが示唆された。

以上の実験結果より、聴覚障害児は、記銘時に後で想起するために何をなすべきかという目標志向的な態度、あるいは、手続的知識が十分に形成されていないと考えられた。また、聴覚障害児の処理水準が「浅い」ために、みかけ上、再生能力が劣るように見えるが、想起する際に何らかの外的な手がかりが与えられると再生は促進されることが推測された。

これらの点は、従来の「欠陥対補償仮説論争」に対して「意味処理的」な観点を導入していくことの必要性を示唆している。

本研究で得られた知見を従来の語彙指導との関連で議論した結果、単語法よりも文章法の方が効果的であろうと推察された。

今後の課題として、誤反応の分析、発達差に関する記憶理論に基づくアプローチ、発達の観点からみた学習様式の変化の検討などが挙げられた。

### 修士論文題目（1983年10月～1984年9月）

北海道大学大学院文学研究科

文学修士

嶋倉 徹 オペラントの手法によるヒトの選択行動の実験的研究

金子康朗 日本語における文の処理方略について：表層

構造上の両義文を手掛かりとして

北海道大学大学院教育学研究科

教育学修士

南出江津子 乳児の行動と母子の応答性の関係：泣きの